

題 目 人は衡平と平等のどちらを選ぶのか—他者の目に着目した検討—

氏 名 大汐七海

指導教員 高橋伸幸

集団で得た利益を成員でどのように分配するのかという分配問題は、我々が社会生活を送る上で避けられない課題である。分配方法としては衡平分配と平等分配が代表的だが、人はどのような場面でどちらを選ぶのだろうか。複数人で話し合っただけで決定を下す場合、個々人の選好だけではなく、それらが集約される過程にも着目する必要がある。分配決定者の間に対立が起こる場合も考えられるためである。例えば成員間において集団に対する貢献度が異なる場合、各立場の分配決定者はまず、自己利益の最大化を図るだろうと予測した。すなわち個人の選好として、高貢献度者は衡平分配を望み、低貢献度者は平等分配を望むだろうということである。しかし高貢献度者と低貢献度者は、利得構造上対立な関係にあった。そのような場合、利己的な行動は集団内での悪評を招き、利他行動を受けられなくなるため非適応的である。そこで高貢献度者は衡平分配を提案しづらく、低貢献度者は平等分配を提案しづらいつ感じると予測した。さらに悪評を回避するため、集団で決定を下す際において高貢献度者は平等分配を主張し、低貢献度者は衡平分配を主張するだろうと予測した。すなわち、個人の選好と社会的決定場面における個人の主張との間に、他者の目を気にすることによってずれが生じる可能性を検討した。本実験では3人1組で課題を行った後、それによって得た報酬をどう分配するか、話し合いを行った。自分たちの報酬を決定する当事者条件と、第三者の報酬を決定する第三者条件を設け、当事者条件においては、課題の遂行具合に応じた低・中・高の貢献度を設定した。グループは衡平分配か平等分配のどちらかを選ぶかを、話し合っただけで決定した。ただし、平等分配には探索的に余りを設け、全体として得られる報酬は衡平分配の方が高い状況であった。先行研究ではあまり検討されていない、余りのある状況について検討を加えるためであった。その結果、低貢献度者も高貢献度者も個人の選好として衡平分配を支持しており、社会的決定場面においても、他者の目を気にして主張を変える傾向は見られなかった。一方で低貢献度者は、自分に有利な平等分配を提案しづらいつ感じていた。個人の選好と社会的決定場面における個人の主張との間に行動レベルでのずれは生じていなかったが、他者の目を気にする程度が分配決定に影響を与えていた可能性が示唆された。